

**1**

解答解説のページへ

$n$  を自然数とする。関数  $y = \sqrt{x}$  のグラフを  $C$  とし、 $C$  上の 2 点  $(n, \sqrt{n})$  と  $(n+1, \sqrt{n+1})$  を通る直線を  $l$  とする。 $C$  と  $l$  で囲まれた部分を  $x$  軸のまわりに 1 回転させてできる回転体の体積を  $V$  とする。このとき  $\lim_{n \rightarrow \infty} n^a V = b$  を満たす正の数  $a, b$  を求めよ。

**2**

解答解説のページへ

次の問いに答えよ。

- (1)  $x$  が正の数 のとき,  $|\log x| \leq \frac{|x-1|}{\sqrt{x}}$  を示せ。
- (2)  $p, q, r$  が  $p+q+r=1$  を満たす正の数 のとき,  $p^2+q^2+r^2 \geq \frac{1}{3}$  を示せ。
- (3)  $a, b, c$  が相異なる正の数 で,  $\sqrt{a}+\sqrt{b}+\sqrt{c}=1$  を満たすとき  
$$\frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} + \frac{bc}{c-b} \log \frac{c}{b} + \frac{ca}{a-c} \log \frac{a}{c} \leq \frac{1}{3}$$
 を示せ。

**3**

解答解説のページへ

$xy$  平面において、原点  $O$  を通る半径  $r$  ( $r > 0$ ) の円を  $C$  とし、その中心を  $A$  とする。  
 $O$  を除く  $C$  上の点  $P$  に対し、次の 2 つの条件(a), (b)で定まる点  $Q$  を考える。

(a)  $\overrightarrow{OP}$  と  $\overrightarrow{OQ}$  の向きが同じ(b)  $|\overrightarrow{OP}| |\overrightarrow{OQ}| = 1$ 

以下の問いに答えよ。

- (1) 点  $P$  が  $O$  を除く  $C$  上を動くとき、点  $Q$  は  $\overrightarrow{OA}$  に直交する直線上を動くことを示せ。
- (2) (1)の直線を  $l$  とする。 $l$  が  $C$  と 2 点で交わる時、 $r$  のとりうる値の範囲を求めよ。

**4**

解答解説のページへ

$f(x) = x^3 - x$  とし,  $t$  を実数とする。  $xy$  平面において, 曲線  $y = f(x)$  を  $C_1$  とし, 直線  $x = t$  に関して  $C_1$  と対称な曲線  $y = f(2t - x)$  を  $C_2$  とする。

- (1)  $C_1$  と  $C_2$  が 3 点で交わる時,  $t$  のとりうる値の範囲を求めよ。
- (2)  $t$  が(1)で求めた範囲を動くとき,  $C_1$  と  $C_2$  で囲まれた部分の面積  $S$  の最大値を求めよ。

5

解答解説のページへ

$n$  を 2 以上の自然数とする。4 個の行列

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad B = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}, \quad C = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}, \quad D = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

を重複を許して  $n$  個並べたものを

$$M_1, M_2, \dots, M_n$$

とする。

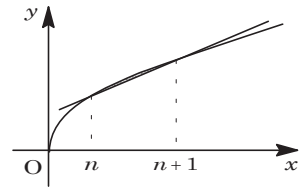
- (1) 積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が定義できる場合は何通りあるか。その数を  $n$  の式で表せ。
- (2) 積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が定義できて、その積が零行列でない  $2 \times 3$  行列となる場合は何通りあるか。その数を  $n$  の式で表せ。
- (3) 積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が定義できて、その積が零行列とならない場合は何通りあるか。その数を  $n$  の式で表せ。

1

問題のページへ

$n \leq x \leq n+1$ において、 $C: y = \sqrt{x}$ と  $x$  軸にはさまれた部分を  $x$  軸のまわりに 1 回転してできる立体の体積を  $V_1$  とすると、

$$\begin{aligned} V_1 &= \pi \int_n^{n+1} (\sqrt{x})^2 dx = \pi \left[ \frac{x^2}{2} \right]_n^{n+1} \\ &= \frac{\pi}{2} \{ (n+1)^2 - n^2 \} = \frac{\pi}{2} (2n+1) \end{aligned}$$



さて、直線  $l$  の方程式は、

$$y - \sqrt{n} = (\sqrt{n+1} - \sqrt{n})(x - n)$$

ここで、 $x$  軸との交点を  $(p, 0)$  とおくと、

$$-\sqrt{n} = (\sqrt{n+1} - \sqrt{n})(p - n), \quad n - p = \frac{\sqrt{n}}{\sqrt{n+1} - \sqrt{n}} = \sqrt{n(n+1)} + n$$

$n \leq x \leq n+1$ において、 $l$ と  $x$  軸にはさまれた部分を  $x$  軸のまわりに 1 回転してできる立体は円錐台となり、その体積を  $V_2$  とすると、

$$\begin{aligned} V_2 &= \frac{1}{3} \pi (\sqrt{n+1})^2 (n - p + 1) - \frac{1}{3} \pi (\sqrt{n})^2 (n - p) \\ &= \frac{1}{3} \pi \{ (n+1)(n - p + 1) - n(n - p) \} \\ &= \frac{1}{3} \pi (n + n - p + 1) = \frac{1}{3} \pi (2n + \sqrt{n(n+1)} + 1) \end{aligned}$$

よって、 $C$ と  $l$ で囲まれた部分を  $x$  軸のまわりに 1 回転させてできる回転体の体積  $V$ は、

$$\begin{aligned} V &= V_1 - V_2 = \frac{\pi}{6} \{ 3(2n+1) - 2(2n + \sqrt{n(n+1)} + 1) \} \\ &= \frac{\pi}{6} \{ 2n+1 - 2\sqrt{n(n+1)} \} = \frac{\pi}{6} \cdot \frac{(2n+1)^2 - 4n(n+1)}{2n+1+2\sqrt{n(n+1)}} \\ &= \frac{\pi}{6} \cdot \frac{1}{2n+1+2\sqrt{n(n+1)}} \\ n^a V &= \frac{\pi}{6} \cdot \frac{n^a}{2n+1+2\sqrt{n(n+1)}} \end{aligned}$$

すると、 $0 < a < 1$  のとき  $n^a V \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ )、 $a > 1$  のとき  $n^a V \rightarrow \infty$  ( $n \rightarrow \infty$ ) となり、条件に反する。よって、 $a = 1$  となり、このとき、

$$b = \lim_{n \rightarrow \infty} nV = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{\pi}{6} \cdot \frac{n}{2n+1+2\sqrt{n(n+1)}} = \frac{\pi}{6} \cdot \frac{1}{2+2} = \frac{\pi}{24}$$

### [解説]

回転体の体積に関する基本問題です。極限值を求める部分も容易です。

2

問題のページへ

(1) まず,  $f(x) = \frac{|x-1|}{\sqrt{x}} - |\log x|$  とおく。

(i)  $x \geq 1$  のとき

$$f(x) = \frac{x-1}{\sqrt{x}} - \log x = \sqrt{x} - \frac{1}{\sqrt{x}} - \log x$$

$$f'(x) = \frac{1}{2\sqrt{x}} + \frac{1}{2x\sqrt{x}} - \frac{1}{x} = \frac{x+1-2\sqrt{x}}{2x\sqrt{x}} = \frac{(\sqrt{x}-1)^2}{2x\sqrt{x}} \geq 0$$

$x \geq 1$  において,  $f(x) \geq f(1) = 0$

(ii)  $0 < x < 1$  のとき

$$f(x) = -\frac{x-1}{\sqrt{x}} + \log x = -\sqrt{x} + \frac{1}{\sqrt{x}} + \log x$$

$$f'(x) = \frac{-(\sqrt{x}-1)^2}{2x\sqrt{x}} < 0$$

$0 < x < 1$  において,  $f(x) > f(1) = 0$

(i)(ii)より,  $|\log x| \leq \frac{|x-1|}{\sqrt{x}}$  (等号は  $x=1$  のとき成立)

(2)  $\vec{u} = (1, 1, 1)$ ,  $\vec{v} = (p, q, r)$  とおくと,  $(\vec{u} \cdot \vec{v})^2 \leq |\vec{u}|^2 |\vec{v}|^2$  より,

$$(1 \times p + 1 \times q + 1 \times r)^2 \leq (1^2 + 1^2 + 1^2)(p^2 + q^2 + r^2)$$

すると,  $p+q+r=1$  より,  $p^2 + q^2 + r^2 \geq \frac{1}{3}$

等号は,  $\vec{u}$  と  $\vec{v}$  が同じ方向であるとき, すなわち  $p > 0, q > 0, r > 0$  から,  $p = q = r = \frac{1}{3}$  のときに成立する。

(3) (1)より,  $\left| \log \frac{b}{a} \right| \leq \frac{\left| \frac{b}{a} - 1 \right|}{\sqrt{\frac{b}{a}}} = \frac{\sqrt{a}}{\sqrt{b}} \left| \frac{b}{a} - 1 \right| = \frac{\sqrt{a}}{\sqrt{b}} \cdot \frac{|b-a|}{a} = \frac{|b-a|}{\sqrt{ab}}$  となるので,

$$\left| \frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} \right| \leq \frac{ab}{\sqrt{ab}} = \sqrt{ab}$$

さらに,  $\frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} \leq \left| \frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} \right|$  から,  $\frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} \leq \sqrt{ab}$

同様にして,  $\frac{bc}{c-b} \log \frac{c}{b} \leq \sqrt{bc}$ ,  $\frac{ca}{a-c} \log \frac{a}{c} \leq \sqrt{ca}$  となり,

$$\frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} + \frac{bc}{c-b} \log \frac{c}{b} + \frac{ca}{a-c} \log \frac{a}{c} \leq \sqrt{ab} + \sqrt{bc} + \sqrt{ca} \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

さて,  $\sqrt{a} = p, \sqrt{b} = q, \sqrt{c} = r$  とおくと, 条件より  $p+q+r=1$  なので, (2)より,

$$\begin{aligned} pq + qr + rp &= \frac{1}{2} \{ (p+q+r)^2 - (p^2 + q^2 + r^2) \} \\ &= \frac{1}{2} \{ 1 - (p^2 + q^2 + r^2) \} \leq \frac{1}{2} \left( 1 - \frac{1}{3} \right) = \frac{1}{3} \end{aligned}$$

よって、 $\sqrt{ab} + \sqrt{bc} + \sqrt{ca} \leq \frac{1}{3} \dots\dots\dots ②$

①②より、 $\frac{ab}{b-a} \log \frac{b}{a} + \frac{bc}{c-b} \log \frac{c}{b} + \frac{ca}{a-c} \log \frac{a}{c} \leq \frac{1}{3}$

### [解説]

(1)と(2)の不等式を誘導として(3)の不等式を証明するわけですが、誘導が丁寧ではありません。ここでは、不等号の向きに注目することが手がかりになります。なお、(2)は、有名なコーシー・シュワルツの不等式ですが、普通に差をとって証明してもかまいません。



3

問題のページへ

(1) 条件(a)より,  $\overrightarrow{OP} = k\overrightarrow{OQ}$  ( $k > 0$ )条件(b)に代入すると,  $k > 0$  より  $k|\overrightarrow{OQ}|^2 = 1$ これより,  $k = \frac{1}{|\overrightarrow{OQ}|^2}$  から,

$$\overrightarrow{OP} = \frac{1}{|\overrightarrow{OQ}|^2} \overrightarrow{OQ} \cdots \cdots \textcircled{1}$$

さて,  $\overrightarrow{OB} = 2\overrightarrow{OA}$  とおくと, 点 P は OB を直径とする円 C 上にあるので,

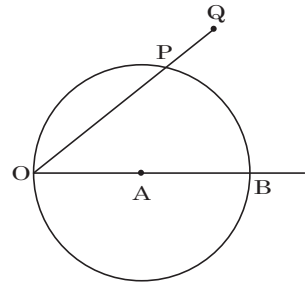
$$\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{BP} = 0, \quad \overrightarrow{OP} \cdot (\overrightarrow{OP} - \overrightarrow{OB}) = 0 \cdots \cdots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}\textcircled{2} \text{より, } \frac{\overrightarrow{OQ}}{|\overrightarrow{OQ}|^2} \cdot \left( \frac{\overrightarrow{OQ}}{|\overrightarrow{OQ}|^2} - \overrightarrow{OB} \right) = 0$$

$$\frac{1}{|\overrightarrow{OQ}|^2} - \overrightarrow{OB} \cdot \frac{\overrightarrow{OQ}}{|\overrightarrow{OQ}|^2} = 0, \quad \overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OQ} = 1 \cdots \cdots \textcircled{3}$$

ここで,  $\overrightarrow{OB}$  と  $\overrightarrow{OQ}$  のなす角を  $\theta$  とおくと,  $|\overrightarrow{OB}| = 2r$  なので,  $\textcircled{3}$  より,

$$2r|\overrightarrow{OQ}|\cos\theta = 1, \quad |\overrightarrow{OQ}|\cos\theta = \frac{1}{2r}$$

以上より, 半直線 OB 上に  $OH = \frac{1}{2r}$  となる点 H をとると, 点 Q は点 H を通り,  $\overrightarrow{OA}$  に直交する直線上を動く。(2)  $l$  が C と 2 点で交わる条件は,  $OH < OB$  である。すると,  $\frac{1}{2r} < 2r$  から,  $r > \frac{1}{2}$  である。

## [解説]

$\textcircled{3}$ 式は,  $\overrightarrow{OQ}$  の OB 方向への正射影ベクトルの大きさが一定という意味でとらえました。なお, 原点を O, x 軸を直線 OA とする座標系を導入する方法もあります。

4

問題のページへ

$$(1) f(x) = x^3 - x \text{ のとき, } f(2t-x) = (2t-x)^3 - (2t-x)$$

すると, 2 曲線  $C_1: y = f(x)$  と  $C_2: y = f(2t-x)$  の交点の  $x$  座標は,

$$x^3 - x = (2t-x)^3 - (2t-x), \quad x^3 - (2t-x)^3 - x + (2t-x) = 0$$

$$(x-2t+x)\{x^2 + x(2t-x) + (2t-x)^2 - 1\} = 0$$

$$(x-t)(x^2 - 2tx + 4t^2 - 1) = 0 \cdots \cdots (*)$$

$$\text{よって, } x = t, \quad t \pm \sqrt{1-3t^2}$$

すると,  $C_1$  と  $C_2$  が 3 点で交わる条件は, (\*) が異なる 3 実数解をもつことより,

$$1-3t^2 > 0, \quad -\frac{1}{\sqrt{3}} < t < \frac{1}{\sqrt{3}}$$

$$(2) \alpha = t - \sqrt{1-3t^2}, \quad \beta = t + \sqrt{1-3t^2} \text{ とおくと, } \alpha < t < \beta \text{ であり,}$$

$$f(x) - f(2t-x) = 2(x-t)(x-\alpha)(x-\beta)$$

ここで,  $C_1$  と  $C_2$  で囲まれた部分について,  $\alpha \leq x \leq t$ ,  $t \leq x \leq \beta$  の面積を, それぞれ  $S_1$ ,  $S_2$  とおくと,

$$\begin{aligned} S_1 &= 2 \int_{\alpha}^t (x-t)(x-t+\sqrt{1-3t^2})(x-t-\sqrt{1-3t^2}) dx \\ &= 2 \int_{\alpha-t}^0 u(u+\sqrt{1-3t^2})(u-\sqrt{1-3t^2}) du \quad (u = x-t) \\ &= 2 \int_{-\sqrt{1-3t^2}}^0 \{u^3 - (1-3t^2)u\} du = 2 \left[ \frac{u^4}{4} - (1-3t^2) \frac{u^2}{2} \right]_{-\sqrt{1-3t^2}}^0 \\ &= 2 \left\{ -\frac{1}{4}(1-3t^2)^2 + \frac{1-3t^2}{2}(1-3t^2) \right\} = \frac{1}{2}(1-3t^2)^2 \end{aligned}$$

$$S_2 = -2 \int_t^{\beta} (x-t)(x-t+\sqrt{1-3t^2})(x-t-\sqrt{1-3t^2}) dx = \frac{1}{2}(1-3t^2)^2$$

すると,  $C_1$  と  $C_2$  で囲まれた部分の面積  $S$  は,

$$S = S_1 + S_2 = (1-3t^2)^2$$

よって,  $-\frac{1}{\sqrt{3}} < t < \frac{1}{\sqrt{3}}$  から,  $t=0$  のとき  $S$  は最大値 1 をとる。

### [解説]

題意より,  $C_1$  と  $C_2$  の交点の 1 つが  $x=t$  上にあることは明らかですが, この点を見逃すと計算におぼれてしまいます。同様に考えると,  $C_1$  と  $C_2$  で囲まれた 2 つの部分は  $x=t$  に関して対称であることから,  $S_1 = S_2$  となります。

5

問題のページへ

(1)  $k$  を自然数とすると、積  $M_k M_{k+1}$  が定義できるのは、

$$M_k M_{k+1} = AA, AB, BC, BD, CA, CB, DC, DD$$

これより、 $M_k$  がいづれでも、 $M_{k+1}$  は 2 通り存在する。

よって、 $M_1$  は  $A, B, C, D$  のいずれか 4 通りであるので、積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が定義できる場合は、 $4 \times 2^{n-1} = 2^{n+1}$  通りある。

(2) 積が定義できる場合について、計算を行うと、

$$AA = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}^2 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad AB = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$BC = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$BD = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$CA = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$$

$$CB = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ -1 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix}$$

$$DC = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}, \quad DD = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}^2 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

ここで、 $P = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ -1 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix}$  とおき、積が定義できる場合をまとめると、

$$AA = A, \quad AB = B, \quad BC = O, \quad BD = B, \quad CA = C, \quad CB = P$$

$$DC = C, \quad DD = D, \quad PC = CBC = O, \quad PD = CBD = CB = P$$

よって、積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  は、 $A, B, C, D, P$ 、および零行列のいずれかとなる。

さて、積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が零行列でない  $2 \times 3$  行列となるのは、 $M_1 M_2 \cdots M_n = B$  の場合であり、 $M_1 = A$  または  $B$ 、 $M_n = B$  または  $D$  である。

(i)  $M_1 = A$  のとき

$ABDDD \cdots DD$ 、 $AABDD \cdots DD$ 、 $AAABD \cdots DD$ 、 $\cdots$ 、 $AAAAA \cdots AB$  より、 $n-1$  通りの場合がある。

(ii)  $M_1 = B$  のとき

$BDDD \cdots DD$  の 1 通りのみである。

(i)(ii)より,  $M_1 M_2 \cdots M_n = B$  となるのは,  $(n-1)+1 = n$  通りの場合がある。

(3) (i)  $M_1 M_2 \cdots M_n = A$  のとき  $AAAA \cdots AA$  の 1 通りである。

(ii)  $M_1 M_2 \cdots M_n = B$  のとき (2)より  $n$  通りの場合がある。

(iii)  $M_1 M_2 \cdots M_n = C$  のとき

$M_1 = C$  または  $D$ ,  $M_n = A$  または  $C$  である。

(iii - i)  $M_1 = C$  のとき  $CAAA \cdots AA$  の 1 通りである。

(iii - ii)  $M_1 = D$  のとき

$DCAAA \cdots AA$ ,  $DDCAA \cdots AA$ ,  $DDDCA \cdots AA$ ,  $\cdots$ ,  $DDDDD \cdots DC$  の  $n-1$  通りの場合がある。

合わせて,  $1+(n-1) = n$  通りとなる。

(iv)  $M_1 M_2 \cdots M_n = D$  のとき  $DDDD \cdots DD$  の 1 通りである。

(v)  $M_1 M_2 \cdots M_n = P$  のとき

$M_1 = C$  または  $D$ ,  $M_n = B$  または  $D$  である。

(v - i)  $M_1 = C$  のとき

$CBDDD \cdots DD$ ,  $CABDD \cdots DD$ ,  $CAABD \cdots DD$ ,  $\cdots$ ,  $CAAAA \cdots AB$  の  $n-1$  通りの場合がある。

(v - ii)  $M_1 = D$  のとき

$DCBD \cdots DD$ ,  $DCABD \cdots DD$ ,  $DCAABD \cdots DD$ ,  $\cdots$ ,  $DCAAAA \cdots AB$   
 $DDCBD \cdots DD$ ,  $DDCABD \cdots DD$ ,  $DDCAABD \cdots DD$ ,  $\cdots$ ,  $DDCAAA \cdots AB$   
 $\cdots \cdots$ ,  $DDDDD \cdots DCBD$ ,  $DDDDD \cdots DCAB$ ,  $DDDDD \cdots DDCB$

これより,  $(n-2)+(n-3)+\cdots+2+1 = \frac{1}{2}(n-2)(n-1)$  通りの場合がある。

合わせて,  $(n-1)+\frac{1}{2}(n-2)(n-1) = \frac{1}{2}n(n-1)$  通りとなる。

(i)~(v)より, 積  $M_1 M_2 \cdots M_n$  が零行列とならない場合の数は,

$$1+n+n+1+\frac{1}{2}n(n-1) = \frac{1}{2}(n^2+3n+4)$$

### [解説]

行列の積と場合の数が融合した難問です。  $A$  と  $D$  が単位行列であることに注目することがポイントですが, かなりの時間を費やしてしまいます。なお, (3)の(v - ii)の場合は, (v - i)の場合に, 左側から  $D$  を 1 個, 2 個,  $\cdots$ ,  $n-3$  個,  $n-2$  個かけていき, 右側の  $D$  を 1 つずつ減らしたものが対応しています。